

LCセミナー2024:ことばと文化を巡る諸相

本専攻では、平成14年度から毎夏開講してきた「教員のための英語リフレッシュ講座」を発展的に解消し、令和3年度から新たな公開講座「LCセミナー」をスタートさせました。LCはLanguage and Cultureの頭文字で、本専攻の母体となった言語文化部の時代から親しまれてきた略称であり、本講座では、これからのグローバル化社会の発展に必須である、最新の言語文化学の知見に触れる場を提供します。令和6年度は「ことばと文化を巡る諸相」と題して、表象文化論、コミュニケーション論、言語認知科学の幅広い分野の第一線で活躍中の本専攻の教員が、それぞれの研究成果について専門外の方々にとってもできるだけ親しみやすい言葉で解説します。3つの異なる分野の講義をきっかけとして、コロナ後もなお続く困難な世界情勢の中で、広く「言語」と「文化」について考えてみませんか。本講座を通して、参加者の皆さまが言語文化学に興味を抱いていただけることを願っています。

- 日 程 令和6年9月21日(土)13時~16時40分(予定)
- 会 場 オンライン(Zoom)にて開催
- 受 講 料 無料
- 定 員 300名(先着順、定員に達した時点で大阪大学 大学院人文学研究科 言語文化学専攻HPに掲示します)
- 受 付 期 間 8月5日(月)~9月19日(木)
- 申 し 込 み 次のリンク先のフォームからお申し込みください。
<https://forms.office.com/r/hk0GepfrTt>
- 問 い 合 わ せ 大阪大学 大学院人文学研究科 豊中事務部庶務係
(E-mail: jibun-syomu@office.osaka-u.ac.jp TEL: 06-6850-5201)

■プログラム

| | | |
|-------------|-----------------------------------|---------------------------|
| | | 司 会 岡田 悠佑 准教授 |
| 13:00~13:10 | 開会の挨拶 | 人文学研究科 言語文化学専攻長 山本 佳樹 教授 |
| 13:10~14:10 | 講義1: 作品の多様な変容をめぐって:中国小説『水滸伝』を例に | 佐高 春音 講師 |
| 14:20~15:20 | 講義2: コーパスの実例から見る現代ドイツ語の対格目的語と相関詞 | 井坂 ゆかり 講師 |
| 15:30~16:30 | 講義3: 英語やフランス語と比較した日本語の特徴・認知言語学的視点 | 井元 秀剛 教授 |
| 16:30~16:40 | 閉会の挨拶 | 人文学研究科 言語文化学副専攻長 里内 克巳 教授 |

*大学院人文学研究科の情報は以下のサイトでもご覧いただけます。

- 人文学研究科 HP <https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/>
- 人文学研究科 Facebook <https://www.facebook.com/HmtOsakaUniversity/>
- 人文学研究科 Twitter https://twitter.com/ou_hmt_info

司会者・講師プロフィール & 講義内容

司会 岡田 悠佑 第二言語教育学講座 准教授

■プロフィール：専門は会話分析、第二言語語用論。著書に『英語教育徹底リフレッシューグローバル化と21世紀型の教育ー』(共編著、開拓社、2017)、*Navigating friendships in interaction: Discursive and ethnographic perspectives* (分担執筆、Routledge、2024)、*Assessing second language pragmatics* (分担執筆、Palgrave-Macmillan、2013) など。論文は *Journal of Pragmatics* などに掲載。

作品の多様な変容をめぐる：中国小説『水滸伝』を例に

佐高 春音 表象文化論講座 講師

■プロフィール：博士（文学）。専門は『水滸伝』を中心とする中国明清時代の通俗小説。主に語りの技法、古典籍の出版形態、翻訳・翻案の問題などを扱う。論文に、『『水滸伝』の人物呼称に見える待遇表現』（『日本中国学会報』第68集、2016）、「毛宗崗本『三国志演義』の「視点」をめぐる改変」（『東方学』第136輯、2018）、「明清通俗小説に見える諸記号について的小論——文繁本『水滸伝』を例に」（東方書店刊『明清文学論集 その楽しさ その広がり』、2024）など。

■講義内容：日本でもなじみ深い『三国志演義』や『西遊記』、そして今回お話する『水滸伝』といった作品は、いずれも実在の人物や実際の出来事が種となり、長い時間をかけて話がふくらんでいき、長編の口語体小説として大成したものです。これらの作品は日本語を含む別言語に翻訳されたり、後世の作家によって新たな小説に改変されたり、漫画・ドラマ・映画などの異なる媒体に改変されたりと、今に至るまで様々な変容を続けています。翻訳やアダプテーション（改変・翻案）について考える際には、「オリジナル/原作」との比較が重要ですが、『水滸伝』（『三国志演義』『西遊記』も同様）における「オリジナル/原作」という概念は、一筋縄でいくようなものではありません。本講義では、それが何故なのかということとを解説するとともに、物語の変容・言語の変容・媒体の変容という点に着目しつつ、『水滸伝』の成立と展開における長い旅路をご紹介します。

コーパスの実例から見る現代ドイツ語の対格目的語と相関詞

井坂 ゆかり コミュニケーション論講座 講師

■プロフィール：東京外国語大学で博士号（学術）を取得。専門は、ドイツ語学・言語学。論文に、「相関詞 *da(r)*+前置詞はいつ現れるのか — 動詞 *warten* の相関詞 *darauf* を例として —」（論集『ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座』同社社2023）、「Infinitive constructions and theticity in German」（*Linguistik Aktuell/Linguistics Today* 262、2020）など。

■講義内容：現代ドイツ語では、後続の目的語が *dass* 文（英：that 節）や *zu* 不定詞句（英：to 不定詞句）等の場合、相関詞とよばれる代名詞 *es*（英：it）が母文に出現することがあります。この *es* の出現・非出現の傾向について、先行研究および IDS（ドイツ語研究所）の大規模書き言葉コーパス *DeReKo* の実例からお話しします。結合価の考え方に基づくと、相関詞の出現は動詞ごとに義務的・任意・出現しないという区分で記述されます。しかし、実際のデータからは、相関詞の出現はスケールの捉えることが可能です。また、実例調査で出てくる具体的な事例、および類似事例の頻度を観察すると、相関詞の出現・非出現の傾向には、それぞれの動詞の対格目的語に対する選択制限が大きく影響していることがわかります。

英語やフランス語と比較した日本語の特徴・認知言語学的視点

井元 秀剛 言語認知科学講座 教授

■プロフィール：パリ第8大学で言語学の博士号を取得。専門は、認知言語学、フランス語学。著書に、『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』（ひつじ出版、2010）『中級フランス語時制の謎を解く』（白水社、2017）、論文に「*Le défini et l'indéfini dans une langue sans article*」（*Langue française* 171、2011）など。

■講義内容：川端康成の『雪国』の冒頭の文「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」はサイデンステッカーの英訳では *The train came out of the long tunnel into the snow country.* となっています。日本語の原文は電車の中に乗っている人からみた描写であるのに対し、英語ではトンネルの外から列車の様子を描写したようになっています。「帰る」と言う動作も日本語では「帰ってきた」や「帰って行った」のように、見ている人の位置によって表現が異なるのに、英語やフランス語の翻訳では *leave* や *se retirer* といった同じ語ですますことが多く差ができません。*He taught me English.* も「私に英語を教えてください」のように教わる自分の気持ちまで日本語では表現します。このように日本語は出来事の内側からものを見ている言語なのです。どこから出来事を見ているのか、という点に注目すると、英語とフランス語の間にも違いが見られます。それらの違いが認知言語学ではどのように扱われているのかについて解説し、またこのような特徴が各国語の時制構造の違いにも反映されていることを示したいと思います。普段なにげなく使っている日本語の特徴に目を向けていただくことで、日本語の素晴らしさをあらためて感じていただければと思っています。